

南郭以後

——所謂文人墨客について——

梅谷文夫

I

高田（小山田）与清が、「今の世の儒・釈・詩・歌・書・画・醫・卜、すべて文人墨客の輩、おほかたは高慢懶惰の小人にして、真心なるはいといとすくなし。」（「松屋叢話」巻二）と歎いたのは、所謂文人の先驅と目されていた服部南郭が歿してすでに五十五年、天明以後は山本北山・亀田鵬斎・太田錦城らが相次いで起って古文辞の弊を痛論し、あまつさえ、寛政の異学禁制に遭遇したために、護社の余燄も、もはやほとんど燃え尽きようとしていた時で、しかも、その異学退治の犠牲となつて福岡藩を追われた護園派の学者亀井南冥が学界のどん底に沈淪したまま、ついに、狂疾とも自ら焚死したとも伝えられて、七十二歳を最期にこの世を去つたちょうどその年、文化十一年夏のことである。医・卜さえも文人墨客の中に数えるなど、南郭在世の頃に比べれば、詩壇の事情は一変し、文人と称するものも、質や意識も、また、大いに異なつていたことに気づくであろう。

南郭以後

同じ文化十一年の日附がある秦星池の序を載せた「江戸諸家人名録」にしても、「此書ヲ編ルヤ儒家専門ニアラザレドモ學者ノ聞エアル者ハ姓名字号居処等ヲ記シテ他方ノ人江戸ニ遊學スル者ノ為ニ転テ諸生ノ投刺ニ便ナラシム」と凡例にうたっているのだが、掲載の人名を見ていくと、學者・詩人・書家・画家にまじって、篆刻として岩瀬京山・益田勤齋らが、また、博識として太田南畝・北静廬らの名があげられているし、同書二編では、雑家として石川雅望・北川真顔が、雑学として村田了阿・山崎美成の名が見えている。編者はこれらの人物を江戸当時の高名な文人墨客と判断して掲載しているのであるが、享保・宝暦ごろであれば、南畝はともかく、他はいずれも文人として認められたかどうかおぼつかなかったはずである。

また、有名な文化十二年の番附「都下名流品題」で東の大関に擬せられた鵬齋は、とかくの評判があったにしろ、当時の文人墨客中、自他ともに認める第一人者であったと見ねばなるまいが、そのかれが、「長ニ於戯文、恒作ニ謬悠無稽之詞」、写ニ人間無辺之情、片言单辞、使ニ読者解ニ願而不止、既以ニ其伎ニ知ニ名於生。」（近世奇跡考）序」という戯作者に過ぎない山東京伝のために、その新者に序文を与えていることも、「一朝見ニ俗子、三日面生ニ塵。」（袁中郎「避俗」）とまでに俗を嫌った海彼の文人とはむろんのこと、徂徠・南郭ら享保・宝暦期の文人とも趣を異にすると言わねばならない。鵬齋によれば、京伝に序を与えた経緯は「一日携レ酒訪ニ余村居。余時會客行レ酒、老人不レ解レ飲、在ニ席末ニ探レ懐出ニ小冊子、遙謂余曰、願假ニ先生一言ニ以増レ価焉。余已沾酔、乃笑領之。」（近世奇跡考）序」ということである。鵬齋本人を前にしてぬけぬけと「以増レ価焉」というところなど、大通文魚の取巻きとして、世辞と追従にあけくれた京伝らしい一面が出ているが、また、いっぽう、「在ニ席末ニ探レ懐」とか、「遙謂余曰」とかの描写に

は、おのずと、文人と戯作者の立場の差があらわれており、なかなか興味深い。で、鵬斎は、客の散つてのち、あらためて京伝の持参した「近世奇跡考」を繙き、仰臥しながらこれを読んだ。すると、「初翻三四葉、順流読過、則搜奇跡、尋幽蹤、而漸至佳境者、如武陵桃源步々着勝地矣。読至其半、則行間字裏、破支離傳會之浮説者、如入洞出洞而遊於別世界矣。読至其末、則聞所未聞、見所未見者、如耆老相會説魏普以上之事矣。其博稽細搜、使二百年間偉事美談之湮没埋寃者、洗雪扶摘、粲然再表、白於今日焉。又其傍捨古人之遺画、考往昔之風俗時變而証之。其奇恠爽朗醒士君子之眼者、非前日戲文構偽取媚之類也。其資談解誣之功亦不為不多矣。」(同上)というわけで、覚えず全篇を読了したのである。だが、京伝の随筆がいかに「博稽細搜」であつて「前日戲文構偽取媚之類」と異なつていたにしろ、所詮は戯作者の好事に出でたもの、それを「醒士君子之眼者」とは、宿酔の筆のすべりであつたにしても、文人たるもの、ずいぶん安っぽく感嘆してしまつたものだ。

もちろん、享保・宝暦期の文人にも、こうした俗との馴れ合いがまったく見られないわけではない。「南畝莠言」巻上の伝えるところによれば、南郭もまた、かつて、藤本理菴の「春駒狂歌集」に序を寄せたことがあつたし、松浦静山は「南郭に酒宴の席にて伎楽の小曲になるべき歌詞を所望しけるに、唐詩を訳して示せしかば満座拍掌感賞せりとなん。道のほとりの青柳を、あれ春風が吹わいな、わしが心のやるせなさ、思ふとのごに知らせたや。是は唐詩の陌頭楊柳枝、已被春風吹、妾心正断絶、君思何得知、と云の訳なり。又妓女扇を出して染筆を乞しかば大江千里月、小野小町花と書て与へしと。」(「甲子夜話」巻一九)と伝えている。もつとも、郭震の子夜歌を訳したのは柳里恭(柳沢淇園)であるとする「夜航余話」巻下の説もある。静山は林述斎に聞いたというが、とにかく、こうしたものの作

者に擬せられるような戯作性を南郭が有っていたことは否定できない。「潮来詞」「小督詞」等の作品がそれを証明しているからである。しかし、そうは言っても、文人と俗との馴れ合いがあらさまになるのは、やはり、南郭以後のことに属すると言えよう。とくに、安永・天明ごろから、南畝をはじめ、建部綾足・都賀庭鐘・朋誠堂喜三二・恋川春町のごとく、士大夫たるべき武士でありながら、儒学に背を向け、俗文学に転向するものが現われるに及んで、文人意識に大きな変化がもたらされたことは否定できない。樸斎老人によれば平賀源内こそ「誠に学問の邪魔をなせし当世俗学の元祖」(『平賀実記』巻三)であるそうで、「能事をなせばそねみを請、悪事をなせば罪を請、中庸の人とならば人の上に立事生涯不可有今、世上評判する山師と語る者は世に不逢より起る」(同上巻五)と考え、「志を立んとする者は世の中の好む所を以て餌を与へずんば成就しがた」(同上巻三)いとして、遂に南畝を「我術中に入て俱に事を謀べしと食客の者を媒介として念比に出合」(同上巻五)い、浮世本の著述梓行に励んだのだという。事の実否はともかく、時代の雰囲気はうかがうことができよう。こうした現象は、漸く膠着したかに見える徳川封建社会の埒内には収まりきれない自由な精神の羽ばたきと考えることもできようが、これら文人がいずれも儒学的教養に支えられた武士であり、農工商三民の上になって人倫を指導すべき天命をうけたところの士大夫であることを想起すれば、しよせん、かれらは、封建社会を維持し擁護しなければならぬ立場にあるという自覚を完全に捨て去ったり、あるいはまた、その文学ないしは芸術に於いて、士大夫の趣味的な余技の域から飛躍して時代の制約の外に新たな完成を遂げようような、氣力の充実した制作態度を保つことなどとうてい望むべくもないのである。そのうえ、民間出身の文人ともなれば、禄仕の機会はまず絶無であり、かつ、かれらの多くは家に資産を有していないのであるから、たとえ他の

嬖りを受けようとも、舌講して生計の資を獲得しなければならず、人氣のために節を曲げ俗に媚び、いつか自分自身を見失っていくのがふつうであった。かくして、安永・天明以後ともなると、余技というより遊戯と呼ぶのがふさわしいような、文学としての創造や完成への努力を放棄した漢詩文が横行し、その間隙を縫って、俗文学の側から、京伝のごとき戯作者や民間の好事家らによって、博搜という努力だけを唯一つの武器とする考証風の随筆が続々と書きあげられたのであるが、博搜という努力の厳しさは他の追隨を容易に許さぬものだけに、模倣と思ひ付きだけを売りものとするような漢詩文の制作者には有無を言う余地を見出だすことができず、そのことが、かれら俗文学者の地位を文人のそれにまで高める一つのきっかけになったのだと見られよう。

以上、所謂文人墨客なる一群のほんの一面を略述したに過ぎないが、与清が、儒はともかくとして、釈・医・卜まで文人墨客の數に加えているのも、こう見てくれば、別にそう突拍子もない考え方ではないことに気がつくであろう。「世儒より文儒が立ちまさりぬる」(「松屋叢話」卷二)とか、そのほか、前後の論旨から判断するに、与清は儒・釈・医・卜であって詩文・書などをよくするものを想い描いているようで、文雅に携るものが、当時、世間一般に、あらゆる階層に亘って広く存在したことを述べたにすぎないことになる。

だが、それにしても、与清に言わせれば、これら文人墨客連の多くは、風雅の心より金がだいじか、名士づらをしていても実力がないか、もったいばかりつけて一向に仕事をしないか、要するに高慢懶惰の小人ばかりであって、「酒のみものくふ友、はなしする友、月花みる友、ものかかせてなぐさまん友、詩に歌につくらせてみん友、舟にあそぶ友、財もたる時の友。」(同上)として交際するのであればともかく、「學者の大業」(同上)たる著述に、序・跋など

乞うべき筋合いのものでは、とうてい、ありえないのだ。じつさい、当時の文人墨客連の無学文盲なこと、無頼放蕩の所行の**かずかず**は、たとえば、平亭散人畑銀鷄著わすところの「一睡鷄南柯乃夢」などに描かれているとおりであろう。ただ、わたしにとって割り切れないのは、仲間の所行を厳しく批判している与清じしんについて、「清水浜臣と仲よかりしなどは、漫筆にも、ところどころに替めて置きながら、竺志舟かの序文に、左右のことより論おこり、乱酒の上とはいひながら、つかみ合同様の喧嘩をなし、のちに大田覃らがとりもちにて、やうやく仲直りとなりしとき、学問よみうたの甲乙をもて、伯仲をさだめんには、おのおの不足のころあるべし、男子第一の勝負は、男根の大小をくらべて、造化にまかせたるがよしとて、覃らがすすめにしたがひ、満座の中にて陽物をかけ出だし、浜臣か大太なりしに屈服して、その方仲にさだまれるとき、例の南畝が、松の屋の松蕈よりもさざ波や志賀の浜松ふとくたくまし、とよみて大笑したりき。」(皇朝学者妙々奇談しりうこと)などという評判がたっていることである。高慢懶惰、無頼放蕩が文人墨客たることのしるしであるならば、評者と清こそそれを名乗るにもっともふさわしい人物であった筈だ。

II

ところで、錦城もまた、文人墨客を指して「唯書画古器ヲ好ミ、筆硯文房ノ具ヲ集テ学者ノ態ヲ裝飾シ、無学不文ニテ芸苑へ濫入シ、学者文人ノ名ヲ冒サント欲ス。」(梧窓漫筆「初編卷上」)とのしっているが、これはかれらの行状に対する単なる反感からだけではなく、文学というものを「天地ノ間ニ文字アル故ハ、事ヲ記シテ後ノ世ノ勸戒トナル為ノミ。去バ詩歌ノ類マデモ、人ノ淫志ヲ遏メ、人ノ善心ヲ導ク事、是其用トスル処ナリ。」(梧窓漫筆「初編卷

下)と考へていたからであつた。すなわち、かれによれば、「學問ノ主意ハ、世道人心ニ裨益アルニ在リ。」(同上三編卷上)であつて、「聖人ノ四書六經トテ、何モ他事アルニハ非ズ。唯是千萬歳ノ人ニ教ユル勸善懲惡ノ具」(同上後編卷上)なのである。だから、學者は「學ヲ講ジ道ヲ明ニシ、天下ノ人ノ惑ヲ解キテ、天下ノ惡ヲ戒メ破リ、天下ノ善ヲ勤メ導ク事」(同上初編卷下)を天命として、「制度文爲ナドヲ悦ブ拘儒、又ハ詩酒遊佚ヲ好ム妄儒、」(同上)などに惑わされず、專經の士として、すべからず、天下を治める「源本ノ理」(同上)を學ばなければならぬのだ。しかしながら、錦城の見るところ、「百年前マデハ、學者質実ニテ皆有用ノ學ヲ爲シ」(同上卷上)でいたのに、「物茂卿ノ徒ヨリ學問皆空詩浮文ニ流レテ經義道學ナド講ズル人少シ。此二十年以來ハ學問益々浮薄ニシテ、書画文墨ニノミ走り、風流ヲ以テ學問トナス。」(同上)ものがはびこり、近頃は、學者は身を修め天下を治めるための術を講ずるところか、「其徒ニ化セラレテ書ノ一葉ヲ讀ムニモ不レ及、讀ミタリトモ文字ヲ校スルニハ過ギズ、何等ノ義理何等ノ妙所アル事も不レ知シテ、是ハ宋板ナリ、是ハ古写本ナリナド云フ事ニナリテ、典籍モ書画器物ト一樣ノ玩物トナリ、學問モ風流好事茶人古董フドクウツヤノ部類トナレリ。」(同上)というありさまで、天下の久安長治を助ける「有用ノ學」(同上)を爲すものはほとんど影を潜めてしまったのである。しかも、これら文墨風流の徒が作るところの詩は、「楊雄ノ所謂、雕虫篆刻ノ類ニテ、人ノ性情ヲ正スルノ用ヲ為ガタシ。碁將棋ナドノ間ヲ消スルト、同格ノ用ナリ。其能ク成得タルモ、人ノ目ヲ悦バシムルト、人ノ一笑ヲ博スルニハ不レ過。書画ト類ヲ同セリ。」(同上卷下)でしかないのに、かれらは、「己ノ小々ノ才智文芸ニ誇リ、王侯貴人ヲモ蔑如シテ無學トナシ、無能トナシ、不智不才ナリトス。」(同上後編卷上)というありさまで、「高慢ノ氣日日ニ長ジ、世人ヲ見テ俗物トナシ、義理ニモ通ゼザル詩文ヲ書キ散ラシテ、予ハ才

子ナリ予ハ博物ナリナドト倨傲不遜ノ悪心悪行ノミ増長ス。」(同上初編卷下)とあつては、錦城としては、何としても宥恕するわけにはいかなかったのだ。同じく謾園を批判したといつても、鵬齋と錦城の間には大きな逕庭があつたのである。

さて、錦城も言うように、文人墨客の放蕩無頼の所行は文化・文政期に至つてことに目にあまるものがあつたわけだが、そうした傾向は、じつは徂徠・南郭在世の頃、すでにその門下にも見られたのである。たとえば、湯浅常山の伝えるところによれば、「石仲縁ハ、若氣一通リノコト故、近頃人々色々願ケルユヘ、交ヲ絶テヲキケルヲ、ユルシテ相見ス。人ガラモ今ハ直リタルトナリ。板美仲ハ今ニ無頼直ラズ、其上ニトカク人ヲタブラカスコトヲスルユヘ、何トモスベキヤウナシ。ソレユヘ社中ハネ出シ置キタリ。ヲシムベキオナリ、ト南郭ナゲキ玉フ。スベテ洛畿ノ間ノ学問、大ニ軽率浮過ナルコト也。中ニモ大阪甚シ。大阪ニテハ予ハ徂翁門人、予ハ南郭門人ナド云タテ、ソレニテ口ヲキキテ、少シノ学問モナキ人多シ。学問ノ浮華ナル上ニ、無頼ヲ加味シタリ、ト南郭モ歎息シ玉ヘリ。」(「文会雜記」卷一上)という状態であつたらしい。当時、上方の文人に無頼放蕩のものがとりわけ多く見られたらしく、南郭はくりかえしそれを批難しているのであるが、これを裏づけるかのように、大阪の木村孔恭にも、「世上游惰放蕩ノ徒、文字ニ托シ、一種ノ無頼漢多シ、余が愧ル所ナリ。」(「兼霞堂雜錄」卷一)の言があり、降つて、竜沢馬琴もまた、京都に遊んだ折に、「文人多くは風狂放蕩、是またこの地の一癖のみ。」(「羈旅漫錄」卷中)と言つているとなると、これは一時の現象ではなく、土地柄と結びついた何か本質的な問題がひそんでいるようにも思われるのだ。室鳩巢がこの間の事情を論じて「もとより人によりて一概には論じがたけれども、多くは異論を好み、名譽を要するは同事」(「駿

台雑話」卷一)であり、ただその病根が異なるのだと説いているのは、その意味で、注意されてよからう。すなわち、「洛陽は風氣和し土地狭し。この故に近き比まで其土の宿儒おほくは温厚柔謹にして制行正しく、威重ありて人望を失はざりき。然るに近年溫柔変じて懦弱となり、威重變じて驕泰となる。空談を尚び、文史を遊び、是をもて自ら尊大にして、曾て遜志時敏する事をしらす。されば良工用意の勞をいかでしるべきなれば、ただ道を容易なる事に意得る程に、はては先賢を慢り、程朱を毀りてやみぬ。」(同上)となり、その結果は「今洛陽の儒、大かた土着に安むして、隱居放言自から足れりとす。もし其人をして世務にあづかり、一官をつとめ一職を弁せしめば、しらすよく其任にたへんや否や。」(同上)疑わしいことになってしまったのである。しかしながら、批難されねばならないのは上方の儒者・文人ばかりではない。すなわち、「関東は風氣薄く土地潤し。それに武人俗吏其地に逼居て、其風おのづから儒者にも移れば、昔は文飾なく質直なるかたありて、取べかりしが、今は質直變じて麤惡となりぬる程に、放蕩輕薄徳義を銷刻し、浮辞怪説文字を造作す。」(同上)というわけである。思うに、江戸に聚る者は録仕の儒者か、そうなる機会をうかがい待つもので、経世済民の志を心に懐き、かつ、それ故に、己れらを人の上に立つべく定められたもの、すなわち士大夫として驕り恃むものでもあった。いっぽう京阪に居るものは、もともと録仕に縁がなく、「貞斎只計フ席ノ講銀」(「閑散余録」卷一)と狂詩によまれた毛利貞斎ほどでなくとも、諸生の人氣を気にしつつ舌講に奔走するものが多かったことが江戸の士大夫を自負する儒者・文人の侮りをうけることになったのであろう。無頼をいうなら、平野金華をはじめ、当然、俎上にあがらねばならない人物が、南郭の属する護園の内部にも幾人もいる。しかもなお、南郭がこれを措いてかれを難じたのは、經濟を捨てて詩文に韜晦していても、それは時世が己れらを容れないが為で

あつて、はじめより民間に舌講するほかなかつた俗儒とは生知の資質に於いて異つていると考へていたからであろう。洛儒の舌講を批難した徂徠の真意を春台に説いて「悪_レ洛儒坐安_三其小_一、不_レ復思_三其外_二」（「答徳夫」南郭集二編卷九）と言つていることでそれを察することができるとだ。

ただ、自ら専經の士を以て任じていた錦城は、既に引用したところでも明らかなごとく、詩文というものをあくまでも勸戒の具であると見て、文学としての意義などまったく認めようとしていないし、書・画に至っては棊・将棋・曲芸なみの地位を与えているに過ぎない。經濟有用を学者の使命と考へる以上、これは当然のことかもしれないが、しかしながら、そのいっぽうで「道は尊く技は賤し。」（「愚雜俎」卷三）であるとか、「手足を以て詮とする技芸は、懈怠すれば日を逐て忘失して、その技劣り、心をもつて煉る技は、老の後までもおとろへずとかや。」（同上）というような考へ方が學問にたずさわるものの側にあつて、書・画をはじめ、技術・技芸一般を不当に低く評価しようとする通念ができあがつていたことも無視することはできない。なぜなら、技術に対する正当な認識・評価のないところに、芸術という觀念が生じよう筈がないからである。詳しいことは別の機会にゆづるが、今日、われわれが用いているような意味での芸術観は、むしろ、文明開化の波に乗つて欧米からもたらされたものであり、一般への普及は、おそらく明治六、七年ごろ、ドイツ人化学者 Gottfried Wagner の陶芸を中心とする啓蒙運動と、ウィーン万国博覽會に於けるわが工芸の成功とをまたねばならなかつた。したがつて、錦城が、既に徂徠・南郭によつて道學者流の文学観が否定され、文学としての詩文の意義の追求が試みられていたのに、あるいはまた、文人画家によつて、詩・書・画三者の間に本質的差異のないことが論じられ、「中々琴瑟の類と同日の論に無御座、」（「玉洲画趣」）ことが明らかにさ

れ、「詩歌書画などの上に、風致氣韻などいふものあるがごとく、すべて何事の上にも、其形と理とをはなれて、妙所あるものは皆第一義の道也。さて勸善懲惡の道をば第二義とすべし。」（「桃岡雜記」という見解すら出されていたにもかかわらず、なおも詩文を勸戒の具と言ひ、書・画を曲芸と同一と視、學者・文人を區別して考えることができなかったにしても、淺狭固陋とのみ片附けられない面がある。ましてや、文人墨客の所行に既述のごとき輕佻浮薄・放蕩無頼の甚しきを認めうるとすれば、かりにかれが、ある程度、文學としての詩文の意義について理解していたとしても、かれらを白眼で見るのはごくあたりまえのことである。錦城の脳裡には、學者・文人は士大夫として「上ハ君ヲ輔佐シ、下ハ三民を撫育ス。」（「梧窓漫筆」初編卷下）べき責務を担うものであり、たとえ、その者が町人階級の出身であつて、現在祿仕していなくとも、いづれ上達して天下國家の政事に預かる機会がめぐつてこないものでもないことは、京都の材木商伊藤仁齋が「紀州ヨリ千石ニテ召サレ」（「文會雜記」卷一上）たという事例があることだし、そのために、士大夫として只管身をつつしみ学をみかいておかねばならぬという意識が胸奥を去來していたのであろう。だから、錦城は、「詩酒沈湎華奢風流ニ陥ツテ、人ノ家ニテハ滅亡ノ助トナリ、国天下ニテハ、乱亡ノ助トナル」（「梧窓漫筆」初編卷下）文人墨客の消閑娛樂の技としての詩文は否定しているが、いっぽう、門人たちには、士大夫としての才識を増益するため、村学究の淺狭寡陋に陥ることを避けるために、「務メテ詩文ヲ作り雜書ヲ読マシムル」（同上三編卷下）のである。論理の粗雑さは言わないことにするが、この程度の批判では滔滔たる時流を押し返すはおろか、一刻支えることも難しかろう。体よく無視されるどころか、却つて蒙昧と眩められる始末であつたのだ。しかし、それにしても、亭保・宝曆期の文人、就中徂徠およびその門下に集うものの顯著な特徴である士大夫意識が、か

これらの亜流に於いてよりも、その批判者に於いてまさしく継承されていることは大いに奇としなければなるまい。

III

さて、ひとくちに士大夫と言ってしまったが、現実の社会構成においてそのような階級が存在していたわけでは、むろん、ない。士大夫とは、言わば儒者・文人の脳裡に描かれた夢であり、また、自己主張でもあったのだ。

たとえば、徂徠は、「吾国の俗説に文武二道と申詞有之候。是は中古より公家武家とて家別れ候より、公家の伝へ候芸を文道と覚え、武家の伝へ候芸を武道と名付候俗説迄の事に候。詩歌も弓馬も芸にて候を、文盲なるものの道と名付け申習はし候にて候。」(「徂徠先生答問書」巻下)と言ひ、「武の本意は民を安んずる仁心より逆乱を静めて国土を安んじ候為にて是則聖人の道の一端に候。治まる時は文を用ひ、乱るる時は武を用ひ、只一箇の道にて、道に文道武道と申事は無之候。」(同上)と主張する。つまり、徂徠は、所謂武士道のごとき特殊の道の存在することを否定するいっぽう、人間存在を、「上たる人」と「人の下に付て一生を可送人」の兩種に分ち、「上たる人の学可申君子の道」(同上)としては、唯ひとつ、聖人の道が存在するだけであると言っているのだ。周知のように、徂徠に於ける聖人とは、所謂「礼樂」の制作者たる唐虞三代の帝王の謂であり、したがって、「聖人の道は専ら国天下を治候道に候。」(同上)ということになる。そこで、「上たる人」である「士大夫の学問は、国君を輔佐して、家中国中を能治め、文武政務の才を致成就候為の学問に候。」(同上)という主張がなされたのであった。しかし、現実には、「上たる人」といえば武士階級を考ふるほかはないのであるから、これを、かれは、その職掌によって文官・武官の二種に区

別し、文官を称して士大夫となそうとした。すなわち、徂徠によれば、たとえば、物頭・侍大将などは、職掌柄明らかに武官であり、武芸に秀いでたものがこれに任じねばならないが、これに対して家老職・奉行などはむしろ文官であつて、聖人の道を正しく学びとつたものこそこれに当るべきなのである。そして、一般の武士は、要するに軍隊を構成する士卒であつて、これら文官・武官より一段下位にあるものとされている。それ故、家老・奉行など文官の地位にあるものが己れを単に武士としてしか意識していないのも、一般の士卒が少しばかりの学問を積んだからといつて士大夫になつたつもりでふるまうのも、いずれも大きな誤りなのである。

現実には存在しない士大夫階級なるものを、何とか理論的に裏付けようとしている徂徠の苦心はよくわかるが、その結果は、いま述べたように、本来、武人とはまったく相容れないはずの士大夫なる概念を、武士階級の中に見出だそうという無理をおかすことになつたのはいたしかたない。それはともかく、徂徠の考える士大夫とは、要するに、人の上に立つもの、すなわち武士階級に属して、かつ、実際に政治を運用する要職にあつて君主を輔佐するものを想定しているのである。

士大夫意識が三民の上に立つものとしての武士の衿恃と結びついているのは、何も、徂徠ひとりの特徴ではない。所謂文人に限つて見ても、たとえば、細井広沢は、「弓芸ニ達シ、」(「閑散余録」巻二)でいて、自らその閑防印に弓馬余業と彫つて、「武士ヲ以テ本色トセラレシ」(「楓軒偶記」巻二)というし、松崎觀海も、「学者ノメツタニ物ヤハラカニ文物ヲ立ナバ、武備ユルミテ乱ヲマネクベシ。」(「文会雜記」巻三上)と言ひ、「士ニハトカクニ武芸ニ精ヲ出サスベキナリ。」(同上巻一上)と考へている。文人ではないが、「詩の道を覚悟したることは、誰にも負けじとぞ思ふ。」(「独

語」と自負していた太宰春台は、毎に処士たることを標榜していたといわれているが、しかもなお、「玄関ニ鎗ヲカケ置、ヤハリ常ノ奉公人ノ武士ノ如シ。」(『文会雜記』卷二下)であったといい、死ぬときは棺の中に木劍を入れさせたとも伝えられている。さらには、南郭にさえ、「文雅ノ政事ヲ行コト至極ヨキコトナレドモ、其国ノ風俗ヲ改過レバ、アシキコトニナル。白石ノ如クニナサバ、畢竟今ノ江戸ノ公方モ、室町家ノ如クニナルベキ歟。」(同上卷一下)とか、「人主ノ學問モアマリヨカラヌ事ナリ。ワルクスレバ文華ニ過ギ、又ハ色々物ズキ出テ、結局文學ナキヨリモ悪キモアル」(同上卷二上)などということばを見出すことができるのだ。それというのも、徂徠をはじめ、護園の文人の多くは、諸侯に仕える武士であるか、過去に於いて禄仕したことがある浪人であるということが、その士大夫意識を特徴づけているからである。

ところで、中国における士大夫階級は、所謂科挙を通過することによって、農工商賈の家に生まれたものであっても、官吏として登用されることが可能であり、かかる階級内容の流通性をその特徴の一として有していたのであるが、わが国にあっては、徂徠も言うように、「人の分限に定り有^レ之候て、士大夫はいつも士大夫に候。」(『徂徠先生答問書』卷上)であり、階級内容の流通を可能にするような、科挙に相当する制度はなく、また、幕府をはじめ諸藩に設けられていた学問所も、武家の子弟で、学問修行に志あるものに学習の機会を与えたに過ぎず、官吏としての登用と、必ずしも、結びついたものではなかった。林家の私塾に対して、幕府がさまざまな援助や保護を与えはしたが、それも、林家の諸生を儒者として育成することに對する助力であって、世間で信じられているような武士階級一般に対する教育機関として設けられていたからではない。幕府・諸藩の御抱え儒者にしても、その職務は、ふつう、為政者の個

人的な教養に資するための所謂侍講であるか、文筆の能力を必要とする各種の事務を処理することであって、新井白石や熊沢蕃山のごとく、実際の政務にたずさわることは極めて稀であったのだ。にもかかわらず、その白石は、「すべて叔世に至り候て、まことしき道は行はれぬ勢に候。それを行ひ候はんとし候は、腐儒にあらずば、愚庸の人たるべく候。」（与佐久間洞巖書）と言わねばならなかつたし、蕃山もまた、「世間の文学の政令に用られざる事久し。」（「集義外書」卷三）と言ひ、儒学が「市井の中にとどまりて、士の学とならず。」（「集義和書」卷一）、現実の政治を指導するだけの權威をもたないことを歎いている。また、藤井傾齋が「近日儒学ノ徒苟^{ゴト}励ス者アレバ、親戚朋友闕然トシテ戒^レ之テ曰、俗ト違^{コト}ナカレ。」（「閑際筆記」卷中）と言ひ、学者に対する世俗の無理解を指摘したこともあった。しかし、佐藤直方に言わせれば、儒者がこのように輕視されるのはまったくもつて儒者じしんの責任であつて、「学者と云へば、詩文章を作り、古事來歴を記し、鐘の銘を書き、諸家の系図を書き、甚しきは、名乗の文字を反して、吉凶を云、歳旦の詩を作らざれば、学者の一分のたため様に思ひ、其外俗人のもてはやすことを同じ様にすきこのみ、終身のする事一つとして聖賢の氣象少しもなし。」（「学談雜錄」）というありさまでは、「国政の事には一向用に立たず。其許に云立らるる類の事ばかりにて仕官し、実は医者にはをとり、人の用に立つ事なし。夫故に其国の家老用人をはじめ、儒者は政事の用に立つものに非ずと思ふ故に、仕官の儒者があつても、夫へ政事の相談する事なし。若し偶々相談しても、道理を知らぬ俗儒なれば、はきとした論説を云出す事もならず、時勢人情に遠くして、今日の適用に叶ふ事をえ云はぬゆゑに、愈々儒者は用に立ものに非ずと思ふも、憎からぬ事也。」（同上）であるのだ。たしかに、中村蘭村が奥儒者であつたとき、「誰一人敬礼するものもなく、当直に出れば若き小納戸衆など孔子の奥方御

容儀は美なりしや醜なりしやなど問て嘲弄しけり」(『甲子夜話』巻四)という仕打ちに甘んじねばならなかったことに、直方の言うような反面があったのかもしれない。しかし、「聖堂と云もの何なることを知らず」(同上)、また「孔子と云は何なりや」(同上)も知らぬ取次衆がいたという現実を思い合わせるなら、儒者を責めるのは酷に過ぎよう。直方の言分はいささかの外していると見なければなるまい。

かくして、心ある儒者の間で徐々にかもしだされてきた一種の無力感、南郭に至ってその極に達する。すなわち、かれは、後述するように、たとえ経世済民の術を修めたとしても、かれらの置かれた社会は学問の意義を解せず、したがってまた、天下は学者の論説に謙虚に学ぼうとする気持のひとかけらをも有しない為政者によって動かされ、かつ、強固な世襲的身分制度が有為な人材の世に出る道をまったく鎖していることをあげ、経済を諦めて詩文の風雅に遁がれ、念いを俗界に絶とうとしたのであった。

以上見てきたように、わが国の儒者・文人に於ける士大夫意識なるものは人倫の指導者として三民の上に立つ武士階級の矜恃に通ずる一面を色濃くとどめているのであるが、しかし、これのみでは錦城に於いて見られるような道学者意識にせいぜい結びつくに過ぎず、所謂文人意識なるものが醸成されるには、まず、詩文の文学としての意義の見と、民間出身の文人が庶民に対して自己の優位を誇りうるような、たとえば、知的優越者としての自矜が既述の士大夫意識を変質させねばならなかった。

さて、朱子学において勸善懲惡の經典とされていた「詩經」を、ただ詩として鑑賞せよと言ひ、また、詩は和歌と本質的には同じものであると論じて、勸戒の具にすぎなかつた詩を道学から解放したのは徂徠であつた。しかしながら、既に述べたごとく、徂徠が經世済民こそ「上たる人」である士大夫の最終の目標だと考え、詩によって人情に通じ古文辭を識ることはその最終目標たる先王の道への一楷程であるというように、詩を道学的制約から解放してはみたまもの、結局は經濟（政治）に関係づけることでその効用を認めようとしているのに対して、護門第一の詩人と評判された南郭が、先王の道はもはや廢壞したのであるから、これを政治に実現すべき学者の任務も今や有名無実に過ぎず、残された道は詩文に韜晦して、治国平天下の代りに芸術的自我的完成を目指すことに自己の存在意義を確かめるほかはないとしている点は注意されねばならない。

すなわち、南郭は、徂徠学の主要な対象である礼樂について中国の歴史をかえりみて、唐虞三代の所謂先王の道が崩れ去つてのち、歴代、政治に志あるものでその治を復活せしめようとしなものはなかつたにもかかわらず、それらの試みがいづれも失敗に終つた事實を指摘して、「古之君子、礼樂以カザルセ文カザルセ其身ヲスカシ、礼云樂云、庶人不ニ与ス知カ焉。其所レ發ス乎英革、追ニ琢ス其章一、以美ス其觀一、以約ス其旨一、不ニ亦空ニ乎。」〔答筑前井土生〕南郭集二編卷一〇〕と言ひ、もはや礼樂は礼樂としての意義や機能を完全に廢壞したのであると断定した。もちろん、徂徠と言えども、三代の治が終焉して孔子が現われたときには、すでに、先王の道が廢壞していたことを認めている。しかし、徂徠は是非淆乱した先王の道を孔子が四方に訪いもとめてこれを正しく整理したおかげで、世に亡び去ることなく、六經として千年のものもなお遺されることになつたと考へている。だから、現実社会において先王の道が行われていなくとも、六經の事と

辞とを研究することによってそれを明らかにし、それにもとづいて道を正し、実践することはじゅうぶん可能であると言っているのである。しかし、南郭の見るところはいささか違う。かれは、「送稻子善序」〔南郭集〕初編卷六〕に於いて、わが日本国が国土を六十六の藩に分っているため、封土の大きさを齊・魯と比較できるものは僅かしかないが、しかも、人民・土地・五穀・桑麻・牛馬の豊饒で、金鉄・魚塩など産業の盛んなことと言ったら、他の小藩と言えどもそこに住む者をして飽き足りない思いをさせることはなく、したがって、どの藩も多くの俊秀を養うに足りる国力をもち、かつ、それら俊秀もまた思いどおりの学業にうちこむことができるのに、儒学をもって仕えると称するもので藩政の大事に加わることができたものが日本中を見廻しても幾人もいないのは、かりに学者が廟堂に登ったとしても、君主に人を得なければ礼楽をもって国政を輔佐することは不可能であり、じじつ、学者を尊敬し重用する君主が、いまだかつて世に現われたことはないのだから、礼楽の実践に於いて、将来に希望をつなぎ、その可能性を信ずることなどとうていできないと言っているのである。じっさい、儒者の社会的地位はかれらの自負にふさわしいといえるほど高いものではなかったし、それに、政治じたいがかれらの嘴をさしはさむ余地がないほど細分化し、専門化してもいた。そこで南郭は、「世之儒士、喜多言_三經世事、其_{以下}其款啓儉窺_三古今一二所_跡、乃適適然顧_三世之不_レ習者、惟己有_上之乎。然其人糝食弗_レ与_レ朝。」〔贈熊本侯序〕南郭集四編卷五〕と疑い、自分のように、内にしては、一職を乗て事を尹伯百司大夫の列に通じたことがないので、制命の出る所、事典の分つ所、礼俗政事、教治刑禁の逆順、都鄙官府、九賦九式の繁を知らず、十室の邑に臨んだことがないので、民の情偽、土の豊險、貨賄の入る所、国用の儲える所を知らず、また、外にしては、列国諸侯の竟に遊んだことがないので、疆場の事、一彼一此、四国の好故、其士大夫の族、

班位貴賤の能否を知らず、会朝述職、通好聘問、軍政の令する所、簡書の守る所を知らず、土田山林、隲畢衍沃の賦にそなえる所のものも知らないで、しかもなおこれを論ずるものは「不_レ過_下務崇_ニ紙上之論_一、而求_レ人之知_レ己_レ爾。」(同上)と断じている。そしてかれは、「不_レ佞無_レ道術。」(答清泰菊禪師) 南郭集二編卷一〇)と言い、また、「至_三千道德之説_一、不_レ佞惰民、未_レ敢以_レ道自居。」(報五井生) 南郭集二編卷一〇)とも称し、時に人が時事を問えば「文士迂濶不_レ知_三事務_一、而沾沾焉空相談自喜、何異_三蹇人謀_レ道_一。故予不_レ敢。」(近世叢語) 卷三)と晒って嘯くなど、先王の道を学ばし礼樂の実踐を志す徂徠学をその内部から否定することになったのである。もちろん、南郭およびその亜流のかかる傾向に対して護社の内部にも、たとえば太宰春台の如く、「聖人ノ道ハ天下国家ヲ治ヨリ外ニ所用ナシ。孔子ノ門人十二賢ヨリ後來ノ学者皆此事ヲ学ブ者也。是ヲ捨テ学ズシテ徒ニ詩文著述ヲ事トシテ一生ヲ過ス者ハ真ノ学者ニ非ズ。琴瑟書画曲芸ノ輩ニ異ナル事ナシ。」(經濟録) 卷一)と批判するものがいた。しかし、こうした批判に対して、南郭門の望月鹿門などは、「徂徠門の高弟太宰弥右衛門春台と申候、紫芝園文集板にも出たり、同門の中にも経学者の由文章も随分達人也。經濟録と云書をあらはして、当世の事を皆々唐に引直し度存念を書たるよし、是は既に文唐の時新井筑後守白石其心得にて色々存直し、称呼の事に極てやめられたるよし、經濟はいらぬことに極たる也。夫を太宰書たるは當時を誹謗するになればでかさぬことなりと、同門にても南郭などは不同心にて、自分は一生詩文を作りて樂みて終りたる見識のほどは高けれと被_レ存候。」(鹿門隨筆)と反撃していささかも悪びれるところがない。徂徠の歿後、護園の学は二分し、詩文は南郭、経術は春台がこれを推したと言われながら、大勢は南郭に従って詩文に趨いた護園内部の雰囲気をこれで察知することができよう。

したがって、南郭をはじめ、これら護園の詩人・文章家に於いては、人倫の指道者としての矜持はむろん、治国平天下の実践者としての自負もかれらの存在を支えるものとはなっていない。それよりもむしろ、芸術的自我的完成を目指し、それをまた成しとげるにふさわしい生知の資質を授けられたもの、すなわち士君子として自己を認めることに於いて、その存在の意義を主張しようとしているのだ。それ故、南郭の詩文論においては「吾志不_レ至、詩亦不_レ至。」（「五七絶句解序」南郭集二編卷七）であるとか、「詩文ハ君子ノ詞ニテ候ヘバ、必シモ匹夫匹婦ニヨク通ズルタメノ物ニテハ無之候。」（「南郭先生燈下書」）ということばから推量されるように、雅俗の別をわきまえ、流俗の一知半解を拒絶した地点にその文学を樹立することが強く要求されている。ことに、かれは、世間が指して文雅の士とする者が、往々にして、文章は達意であればこと足りると称していることを批判して、「不_レ修則言不_レ文、言不_レ文則觀不_レ美、辞不_レ約則旨不_レ微、旨不_レ微則野而固也。」（「送江文伯序」南郭集二編卷六）と論じ、詩文の本質が修辭にあることを強調したのである。ただ、ここで断っておかねばならないのは、「南郭先生燈下書」について「有_二備後人鍋嶋公明字伝蔵者_一。学_二東溟、篤_二信物氏学_一。嘗偽_レ作物氏及服南郭与_レ人論_二文章_一。国字書二種ハ、其一為_二南郭燈下書_一。」（「先哲叢談」後編卷六）という説があることだ。内容を検するに南郭の他の文章と甚しく矛盾するような箇所もなく、同書も「燈下書不_レ得_二微_一。檢偽作之跡。」と言うくらいであるから、南郭の詩文論の一解説書という扱いで以下引用することにしよう。すなわち「南郭先生燈下書」によれば、詩は風雅渾厚の情を諷詠するものであって、道理を言い尽す為の具ではない。「モノコトニ温和ニ、人ヲモ浅ク思ヒステズ、云出ルコト葉モ宛曲ニシテ、何トナク人ノ心ヲ感ゼシムルヲ専一ト仕事」である。だが、「同ジク悲シミ喜ビラ述候ニ、詞ニヨリ格別輕重雅俗モカハリ候故、詞ノエラミ第一」であって、

「ソレトハナクテ人ノ感ヲ起ス様ニ」詞と風体とを仕立てなければならぬ。ところが「世上不案内ノ詩人ハ、詩ノ詞モ文ノコトバモ分チナク覚候程ニ、アシク聞エ」るのであって、「スベテ詩家ノ詞ト申テ、一種別ノ物」なのである。同じことは文章についても言えるのであって、「文章ハスベテ、中華ノ語ニ候ヘドモ、其内俗語雅語トワカレタル品心得ベキ」で、「六経ヲ始トシテ、雅語ハ皆潤色シテ世俗通用ノ語」とは異なるのである。しかも、「潤色シタル雅言ノ書

ノ内ニテ、古今品位ノワカレタル事」を理會して、六経をはじめとする前漢以前の古文を範としなければならぬ。

後漢以後唐に至る八代は、修辭を重んじたとはいへ、古文の体はおとろえ、文章は次第に俳に近くなり、徒らに對句の技巧をこらすだけのものではない。また、韓・柳二家は、古文復興と稱しているものの、実は新たにひとつの文体を創始したのであって、これを學ぶとも「奇古成古文」は作れないが、「王李ナドノ古文辭ト申ハ、法度も深く、見エニクキ物」であるから、初學のものはずこれを學ぶことである。而して、李于鱗・王元美らの所謂古文辭の主張とは「達理脩辭ノ兩事ハ、六経以來相兼ルトイヘドモ、韓柳ヲ學ブ者、宋朝ヨリ漸理ヲ多ク説事ニ成リ、脩辭ノ方ハ不足、唯理サヘ明白ナレバ妙ト申様ニ成行候故、其弊ヲタメ直」そうということであつて、古文辭に從い「スベテ文字モ語勢モ抛有様ニ用イ候ヘバオノヅカラ文章モ実大ニ見エ、意味モスグ聞エ候事勿論ニ候」なのである。抛有云々とは、要するに、「文者言之修也。」（答筑前井土生）南郭集二編卷一〇）であつて、しかも「不能_レ舍_レ典籍_レ而為_レ言。」（同上）ことを言つたものであろう。宋詩の鄙倍なのは「創者之過」（唐後詩序）南郭集初編卷七）とも言つている。詩文の制作とは、まさに、「知者不_レ創_レ物、述_レ之守_レ之、參_レ之風雅」（同上）ものでなければならぬのだ。

こうした南郭の所謂古文辭の主張を推し進めて行けば、当然、そこに、「必竟文章ハ、學力ト人オト兼合候事」（南

郭先生燈下書」という考え方が成り立つことは容易に納得できよう。要するに詩文の制作とは、かれの理論によれば、鋭い直観や、豊かな想像力、生き生きとした感受性を用いてするというより、六経をはじめとする古典の古語・古文辞についての学識によって煉りつめて作りあげるものであり、したがって、優れた学識を有していると自他ともに認める知識階級、すなわち士大夫こそ、詩文の制作・鑑賞を為すにふさわしい存在だということになるのである。同じように士大夫と言っはいても、徂徠の場合は、「上たる人」即ち政治的支配者層として、士農工商なる既成の階級観念と矛盾しないよう、その存在が意義づけられたのであるが、南郭に於ては、むしろ既成の階級観念に束縛されない別途の存在原理を有するものとして構想されていることに注意せねばならない。つまり、南郭の場合は、中国の士大夫層と同じく、学問人才さえあれば士農工商の何れの出身であってもこれに加わりうる階級内容の流通性を前提としているのであって、ただ、科擧の代りに有力な既成文人の推輓がこれを認めるわけである。のちに、詩社や書画会が文人たちの間で重要な意義をもつことになったのも、そしてまたそこから所謂文人墨客なるものが生じたのも、ここに胚胎するのである。かくして、南郭は、読書、著述、詩文の制作・応酬、士大夫間の文雅な交際をその主要な関心事としつつ、修身齊家治國平天下の如きはむしろ関わりないことを誇りとして、僻であっても断じて俗ならざることに於いて自己の存在を主張しようとしたのであった。

南郭の友人金華は、自負の高さ、自己主張の烈しさにおいて、南郭よりさらに甚しいものがあつた。すなわち、南郭の伝えるところによれば、「徂徠先生門、至者踵日相接、操觚茲多矣。乃相与言ニ爾志於閑宴、則子和者時時從レ旁奇ニ其論ニ上レ之、坐中莫不ニ抵掌稱レ快者也。人或難ニ激論太過而無レ当、則子和益敢為レ狂自快、然滑稽不レ窮、人人不

能屈之、蓋余亦時何_レ知其狂有所託也。吾党之士、何嘗不自謂_レ文漢以上、詩則不下_レ天寶、而假_レ道於王李諸子者、間或欲_レ襲取_レ、則子和大嘲哂曰、不_レ意王李復教_レ爾輩毒_レ矣。乃取下_レ故腹所_レ非若_レ蘇黃_レ者_レ、為_レ口稱_レ之以激_レ其人。○(「送子和序」南郭集初編卷六)といふことである。したがって、逸話も多く、佳節の式服代りに妻の衣服を着用して出仕したとか、師徂徠が吉原を知らないことを承知していながらその所在を問ひ、隅田川の東だといふ答を得るや、「先生妄言、不_レ惟文字上_レ、於_レ地理_レ亦能妄言。」(「先哲叢談」卷七)と擲ったとか、妓楼に入りびたりで、徂徠がこれを咎めると、その一時は慎しむが、行跡はついに改まらなかつたとか、「敖_レ弄_レ一世_レ自快」(「近世叢語」卷三)とする、その無頼で常軌を外した言行のみがことごとしく伝えられたために、その文学の地位までも軽んぜられる始末となつてしまつた。しかし、「其愛_レ人亦出_レ天性」(「送子和序」南郭集初編卷六)と言われ、「性喜_レ善疾_レ惡、視_レ人善_レ不_レ番自_レ己、若_レ將_レ加_レ諸膝_レ不_レ置。」(「文莊先生墓碣」南郭集二編卷八)とも言われた反面のあつたことを想起して、一世を侮弄するかと見えた言行の真意を測つてみる必要が、かれに關しては、あるのではなからうか。つまり、かれは、世間の偏見に抗してあえて文学をもつて君子一生の業とする気概もなく、ただ、虚名にあこがれ立身の機会を求めて護社に集つた同輩の多くに慊らず、また、形骸のみの道德倫理を振りまわす世俗常識の徒にも耐えられなかつたのであろう。徂徠はさすがにかれを知つており、「カレハ千里ノ駒ナリ。度々コレヲセメバ、恐ラクハ逸セン。尋常ノ御者ニテハ維ギ難シ」(「閑散余録」卷二)と言つていたという。南郭に至つては「夫流俗者、何久得_レ知_レ子和_レ也。」(「送子和序」南郭集初編卷六)とさえ言つてゐる。かれの文学は、かつて、「南郭も金華も徂徠の高弟、近代の才子其の作によりて、古人に劣らぬ程の上手にて候。」(「蛻巖先生答問書」卷中)と並称されたほどの地位を、今日もなお与へること

はいろいろと躊躇させられる面があるが、しかし、文人としての身構えに於いては南郭といささかも差をつける理由はないのである。

江邨北海も言うように、徂徠門下には才俊が多く、名の顯われたものとして春台・南郭のほか数十人を数えることができる盛況であったが、「然細考之、則其中大有軒輊、蓋大名之下易成名耳。況赫赫東都、非他邦比、或攀竜附鳳、歛託禁脔、或曳裾授簡、長沾侯鯖、假虎威者、附驥尾者、青雲非難致也。加之邦国士人、各從其君往來、結交同盟、遍滿諸藩、褒同伐異、鼓盪扇揚、靡遐僻不屆、是其所以顯赫一時也。退察其私、則羊質而虎文、名過其實者亦不鮮。」(「日本詩史」卷四)というのが、その真相であったようだ。かれらの評判をしらべていくと高蘭亭(高野子式)は、「大上戸にて、酒器を物数奇せる中に、いかにして得たりけん、鎌倉教恩寺に什物とせし、重衝卿と千寿の前と、遊宴ありし盃を得て祕藏せり。(中略)これにも不飽、觸體を思ひ付て、尋常の物は面白からずとて、鎌倉に至り、大館二郎が塚を発き、其觸體をとらんとするに、忽ち雷雨甚しかりけれど、怪しとも懼れず、取出し帰来て、頓て酒盃としたるに、その翌年其月其日に及び、何の故もなく死せり。」(「閑田次筆」巻四)と評判されたことに無類なもの、莊子謙(村田允益)は、「負才好奇。」(「日本詩史」巻四)もの、石子游(石島正猗)は、「往々神氣軒翥、筆端活動、若濟以精細、則可為詞壇旌門、惜乎其人輕躁、下筆亦疎率耳。」(同上)であって、「放蕩好酒、不能為家。」(同上)もの、鶴孟(鶴殿左膳)は、「生長富貴、氣岸甚高、党同伐異。」(「錦天山房詩話」下冊)もの、平子彬(三浦義質)は、「見解奇抜、出入意表。」(同上)もの、板倉瑣溪は、「聡敏絶人、而放蕩不羈。」(同上)であって、「恃才褻傲、愚弄一世。」(同上)もの、というように、才に溺れて常軌を逸し

た言動を批難されているものが実に多い。いずれも金華の徒であって、程度の差こそあれ、芸術的自我的完成を目指すにふさわしい生知の才能の持主であることを自負し、己れらの外は、農工商はもちろん、貴族・武士・僧侶・道学先生らすべてを俗物と見下していたのである。

南郭をはじめ護園の詩人たちが志を經濟に向けようとせず、芸術的自我的追求にはしつたとはいへ、南郭は、天下の文宗として諸大名と文雅の交りをもち、かつ、歳々百五十兩の束修に支えられて「処士ニアノ如クユタカナルクラシナシ。」(「文会雜記」卷二下)との評判だし、金華は、文雅に理解深い守山藩主頼貞に仕えた儒官であるというように、恵まれた生活の基盤を有していたものはよいが、しからざるものは、かれらの蔑視する世俗の間を生活の資を得るべく奔走しなければならなかった。湯浅常山の伝えるところによれば、詩名南郭に並ぶ護園の俊才蘭亭でも、その門人が「詩ヲ知ヌ人ニヨク詩ヲ見セタマフ、タヘガタキコトナルニ、先生ハヨクタヘ玉フト、大ニ嘲ロウアリシカバ、子式足下ハ世祿ナリ、予ハ詩ヲ産業トス、詩ヲ人ニ見セザレバ餓死スト、アララカニ答タルト也。」(同上卷一下)というのである。他の群小詩人は推して知れよう。祿仕せざる学者・文人のために医を学んで生計の足しにせよとしきりに言われたのも、また、この時期である。しかも、南畝が、「享保の中頃より文雅草莽に下たり」(「仮名世説」卷下)と言っているように、町人階級の子弟で文雅に志すものが次第に増加し、安永・天明期には、片山北海の混沌社、竜草廬の幽蘭社、安達清河の市隱草堂などの詩社が結成されて時好に投じ、文化・文政期ともなれば、「泰平の御代の商人百姓は、以の外に脳味噌が上り、米芾其間まゝで当坐帳を記し、唐宋の詩を二上りに諷ひ、耕し収る業を捨て天下國家を治る算段をやらんと計る。かかる時を得たり賢しと、都会に種々の塵みぢを開き、詩を誇ひ、書画を売り、金儲をせ

んと、互に売名の引札をするに、燼本に火の付、唐紙に水のしみる如く、農商之若もの其門に入り、或は身をあやまち、或は家を亡すもの幾千人、(「妙々奇談」序)というありさまで、例の番附では西の関脇を占めた菊池五山などは、「富家の子弟之詩を一集とし、其人々の身上により、百疋二百疋或は千疋、刻料雜費としてせしめん」(「妙々奇談」)と奔走するしまつで、かれらに於ける士大夫意識の喪失と俗との馴れ合いとは、南郭以後の文人意識を大きく変えてしまったのである。

否、変化したのは文人意識だけではない。かつては、雅俗の別を厳しくつけることをその生活原理としていた文人が、その生命とも言うべき詩文に於いてさえ、観海のごとく、「トカク詩文ハ面白クスベシ。聖人ノ定タマヒタルコトニ非ズ。人倫ノ教命礼樂治術等、聖人ノ定タマヒタルコトハ、少モノレニタガヒテハナラズ。詩文ハ聖人ノ定タマヒタルコトニ非ズ。トカク面白シテ後世ニ伝ベシ。」(「文会雜記」卷二上)と云うものがあらわれ、しかも、その門下より南畝が出でて、「雅人の俗を弄ぶばかりはかへりて雅のさたになるもあぢなものなり。」(「仮名世説」卷上)と称して弄文の風を一世に弘めたことは今さら指摘するまでもない。津阪東陽の語るところによると、かれが「諸生たりし頃は、詩人咏物を競ひけるを、先輩いやしめて輕薄とす。況や香奩体のごときは、あえて指を染ざりけり。」(「夜航余話」卷下)であったのに、「近年は竹枝詞おこなはれて、狭斜淫佚の状をはばからず、輕薄をほこりて、風流とするに至れり。」(同上)で、しかも、その竹枝詞を得意とした菊池五山は「或云、竹枝雖曰紀風俗、恐不免淫靡之誼、余曰、贈芍採蘭、聖人何以不刪、其人無以答。」(「五山堂詩話」卷三)と居直るしまつである。また、俗中の俗として士大夫より賤しめられていた俳諧についても、たとえば關亭は、乙由の「浮草や今朝はあちらの岸に咲く」(「麦林集」)

を評して「此句ノ如キハ詩モ俳諧モ同情ニテ、実ニ絶唱トイフベシ」(「閑散余録」卷二)と言ひ、錦城は「今世の詩ハ遙ニ俳諧ニハ劣レリ。」(「梧窓漫筆」初編卷下)とさえ言っている。乙由の句は苦界に沈む遊女を詠んだものとしても、黏皮帶骨、通り一遍の理窟をこねたにすぎないし、錦城もまた同じような見込みがちがいをやっているのだが、それにしても時勢の推移を思わせる。俳人の側からも、与謝蕪村のように、「芥子園画伝」などの中国画論を援用しながら「詩と俳諧と、何の遠しとする事あらんや。」(「春泥句集」序)と唱えるものが出るし、さらにまた、五十嵐篤好のごとく、「近世の俗文といふもの、漢文にもあらず、和文にもあらず、しかも日用を達し、天下に益ある事はかりなし。是漢風にからめられず、文字を我物にして自由の働をなせるなり。」(「天朝墨談」卷三)というものが現われたところを見ると、文学観そのものに大きな変化が起っていたのだ。

V

護園の文人を中心に、文人意識の変質してゆく過程を述べてきたのであるが、それを要するに、享保・宝暦期の文人は、経済(政治)への志望を断ち切るべく、かれらの所謂無用の詩文に韜晦したのであったが、安永・天明ごろより、その士大夫意識が薄れ、俗との馴れ合いが顕著になり、文化・文政期の所謂文人墨客たちともなると、経済はまったくかれらの関心の外になり、詩文はかれらの逃避の場では、かならずしも、なくなっていたということであった。所謂文人墨客に於いては、士大夫の雅文学たる詩文のほかに、以前なら遊芸・娯楽と見られていた書・画をはじめ、狂詩・狂歌・狂文・俳諧・戯作小説・篆刻・骨董など、すべて文房にかかわりあるものは、何れも、一応は、それを

表芸として文雅の境に出入することを憚る必要はなかったのである。かれが文人墨客の一員であることは、詩社の主宰者なり、それに準ずる有力者が、書画会など、かれらの形成するサロンへの出入りを許すことによってこれを保証した。それ故、かれら文人墨客の主要な関心事と言えば、万巻の書を読み万里の路を行き、胸中の塵濁を脱去して、士大夫たる文人の生知の気韻を鍊磨し、鮮烈な個性の完成を目指すことではなく、実にかかるサロンを中心とする社交生活に於いて、義理を欠き友情を損ねて除かれることのないようふるまうことであつたのである。しかも、かれらは、己れらを、世俗の倫理道德その他いっさいの社会的羈絆によつて拘束されることのない、より高次な存在で、かつ、既成の階級觀念の外にあってこれを超越する存在であると規定することによつて、かれらに対する如何なる批判も受けつけぬ言わば無風地帯に逃れ、その結果、かれらの文学から、人間とは何か、その存在することの意義は奈辺にあるかの問をいつか忘失してしまつたのである。かれらが詩は人情の諷詠と言いながら、その人情が、現実に生きてかれらのまわりに存在する人間のそれではなくて、先王の道の制作された古代中国の理想社会に於けるそれであるということは、かれらの文学が人間不在の上に成り立っていることを端的に物語っている。こう見てくれば、かれらの文学が、いかなる場合も、つねに遊びに終つてゐることはむしろ当然であつたのだ。

かくして、かれらのとめどもない才能の浪費は、その文学・芸術を不毛のままに、来るべき近代の胎動の中で、葬り去られてしまふのである。